

## 38 吉益東洞『医方古言』攷

館野 正美

## 一、はじめに

吉益東洞の『医方古言』は、吉益辰の「東洞先生著述書日記」にも見えず、僅かに『国書総目録』及び『古典籍総合目録』に『医事古言』の別題として挙げられるに過ぎない。他方、『医事古言』は、前掲「著述書日記」に『古書医言』の前身として掲載される刊本（文化二年・同五年）である。

ところが、この『医事古言』には、演者の管見に及んだものだけでも十部近い写本があり、しかもその多くが『医方古言』と題号している。又、そのいくつか（例えば北里研究所東洋医学総合研究所蔵本）には、文化二年以前の識語がある。

かくして、『医方古言』とは、『医事古言』が校定・刊行される以前の原本の繕写本の題号であったと推測され

るのである。

## 二、『医方古言』と『医事古言』の比較

そこで今、この『医方古言』を刊本『医事古言』と比較して得られる所見のいくつかを、以下にいささか挙げてみたい。

① 『医方古言』（以下、医方と略記、底本は、演者みずから校合した自家本を用いる）に、『淮南子』（主術）の一文に対する東洞の注記として「鵝毒者附子也」とあるのを、刊本『医事古言』（以下、医事と略記）では、源信綱が「淮南子」高注によつたのであろうか「鵝毒者鳥頭也」と改めている。これはしかし、更に後の『古書医言』において、鳥頭と附子は同一物であると記されている。『薬徴』によれば、確かに東洞はこの見解を執っており、医方のことばは、東洞が『広雅』（釈草）の「奚毒、附子也」によつて記したものであろう。源信綱は東洞の本意を理解しないまま、ただ単に『淮南子』高注を見て校定したのであろう。

② 『論語』（子路）の一文についての「鄭玄曰、言巫医不能治無恒之人、何則無恒之人不能守医之言」というコ

メントを、医事では鄭玄と東洞の発言を明確に分割して  
 へ鄭玄曰、言……∨とへ為則曰、何則無恒……∨と載せ  
 ている。果たして『古書医言』においては、更に詳しく  
 諸説をも引いて敷衍している。医方が医事の下書き的存  
 在であること、及び源信綱の適切な校正の跡が窺える。

尚、源信綱の校定としては、他に、『国語』や『関尹子』  
 の部分が医方では分散して掲載されているのが、医事に  
 至っては整理されて、ひとつにまとめられていることな  
 どが指摘され得よう。

③ 『易経』についてのコメントにへ夫易不可曲要、故  
 是……∨とあり、おそらくこれはへ易不可為典要∨(『易  
 経』繫辭下による)の誤りであろうと推されるものの、医  
 事においてはへ夫易不可曲要校、以是……∨と、更に誤  
 りを重ねて、いかようにも訓じようのない文章となつて  
 いる。確かにへ枚∨字のある医方もあり、必ずしも全面  
 的な源信綱の校定不足とは言えまいが、やはり問題の残  
 るところではあろう。

④ 医方にある『鴟寇子』・『齊丘子』が、医事では刪  
 られている。その理由は不明である。但、『古書医言』で

は復活している。或は頁数の関係であろうか。

⑤ 当然のことながら、文化二年版医事における第二  
 八丁と第三八丁の錯簡(文化五年版において修正された)は  
 見られない。

### 三、まとめ

以上、従来の諸説を覆すが如き所見はないものの、『医  
 事古言』の原本の面目を窺わせる好資料としての『医方  
 古言』の内容を概観し、これを『医事古言』と比較して、  
 いくつかの問題点を指摘した。既にいささか発表した小  
 論と合わせて、東洞の医学説の足跡を跡づけ、又その『古  
 書医言』成立の状況を明らかにする一端となしうるもの  
 であったと思われるのである。

(北里研究所東洋医学総合研究所・日本大学文理学部)